

書評

Evelyn Kaye: *Adventures in Japan: A Literary Journey in the Footsteps of a Victorian Lady.*

Boulder, Colorado, Blue Panda Publications, 2000, 168p., \$21.95

齋藤元子

本書は、19世紀後半のヴィクトリア期に世界各地を旅した英国人女性旅行家イザベラ・バードの日本探訪記 *Unbeaten Tracks in Japan* (原著1880, 高梨憲吉訳『日本奥地紀行』1973, 平凡社東洋文庫)をガイドブックとして、バードの足跡を120年後に辿った旅の記録である。著者エヴェリン・ケイは、本書に先立つ1994年にバードの伝記 *Amazing Traveler Isabella Bird* を著し、また本書の直後に旅行関係の専門出版社より古典シリーズの第一弾として出版された *Unbeaten Tracks in Japan* に紹介文を寄せている。

著者のプロフィールにもう少し詳しく触れると、英国に生まれ、カナダ、フランス、イスラエルでの生活経験があり、現在は米国コロラド州ボルダーに住む。旅行家としてこれまでにヨーロッパ、オセアニア、中南米、インドなどを訪れたほか、ガラパゴス諸島への航海やロシアの調査船に同行し南極大陸での氷山の観測やペンギンとアザラシの生態観察に参加している。著書は19冊を数え、米国ジャーナリスト・作家協会の会長を務めたこともある。

著者はガレージセールで偶然に *A Lady's Life in the Rocky Mountains* (1873) を見つけたことがきっかけでバードの虜になった。そこには著者自身の暮らすコロラドが実に生き生きと描かれており、以来バードの目を通して風景に接するという気持ちが芽生えたそうである。 *A Lady's Life in the Rocky Mountains* は現在も版が重ねられ米国では広く読まれているようで、評者が立ち寄ったいくつかの公立図書館にも所蔵されていた。

バードの日本での足跡を辿る旅は、東京での準備に始まり、日光、会津、山形、田沢湖、角館、弘前、青森などを経て北海道に渡り、函館、白老、登別を訪れた後、最後の数日を横浜で過ごすというものであった。本書はバードの主要滞在地ごとに章が組まれており、各章の扉頁には *Unbeaten Tracks in Japan* の該当箇所からの引用文と著者自

身が入手した英文のガイドブックやパンフレットからの抜粋が並べられている。著者がバードゆかりの地を120年後に訪れて最も驚嘆したことは、バードの名前が今でも至るところで語り継がれていることであった。日光の金谷ホテルには宿泊した著名人の一人としてバードの写真が飾られていた。バードがアジアのアルカディア(桃源郷)と賞賛した山形では、地域の環境保全と美化運動が“アルカディア・キャンペーン”と称して展開されており、イザベラ建設と名乗る会社まで存在した。北海道で訪れた博物館では売店でバードの著書が販売されていた。

ヴィクトリア期の旅行家と呼ばれる人物はバードの他にも存在するが、彼女の複数の著書が依然今日においても版を重ねている理由として、バードは他の旅行家とは異なり「もしすべての人々が英国人のように振る舞えば世界はもっとよくなるに違いない」あるいは「英国は他の国々を植民地として征服する当然の権利を有している」と言ったような考えを持ち合わせていなかったからであると著者は述べている。またバードの女性旅行家としての果敢な姿に現代の女性たちは自らのロールモデルを見いだすことができ、バードの人生や著書は世界中のあらゆる女性にインスピレーションを与え得るものであるとも著者は記している。

バードの著書には確かに植民地的な色彩はなく、他民族の文化を尊重しようとする姿勢が随所に見られる。しかし植民地主義に反対するような強い主張が見られないものまた事実であろう。それはバードの訪れた場所の多くが英国の植民地ではなかったということばかりではなく、むしろ旅先の選択も含めて植民地政策を正面から論じることは避けたいという意識があったのではないだろうか。

反植民地的な主張を明確に掲げたヴィクトリア期の女性旅行家というならば、バードよりもむしろメアリ・キングスリの名を挙げるべきであ

ろう。キングスリは1893年から1895年にかけて2度にわたり西アフリカを訪れ *Travels in West Africa* (1897), *West African Studies* (1899) などを著し、1900年ボーア戦争の戦場に看護婦として赴いたが、腸チフスに感染して37歳の生涯を閉じた。彼女はアフリカ人には彼ら独自の法や社会システムが存在すると主張し「文明化」という名の下に彼らを統治しようとする英国の植民地制度をその著書において徹底的に批判した。バードの著書をキングスリのものと対比させてみると、バードの人気の根拠を植民地政策に対する態度と関連付けた著者の説明は今一つ説得力に欠ける気がする。

またバードを現代女性にとっての一つのロールモデルと位置付けた点については、社会的な制約にとらわれずに自分の可能性を思う存分試したいと願う女性にとってバードは一つの理想像に映るだろう。しかし、バードが満足感の得られる旅を遂行できたのは、女性というジェンダーによるものではなく、英国人という民族的優位性に負う点が多かったことを見逃してはなるまい。

日本の旅においても、英国人であったがゆえに得られた様々な特権が彼女の旅を容易にした。東京を出発する前に英国公使を通じて東京以北を自由に旅行できる旅券を入手してもらったり、函館では領事を介して馬や人夫や宿泊先などを保証する証文を知事に発行してもらっている。これらはバードが女性であったからではなく英国人であったから受けられた行為にほかならない。したがって、民族という視点を抜きにしてバードの行為を世界中のあらゆる女性にインスピレーションを与

えるものと見なす著者の主張には問題があると思われる。

本書は旅行記/ウィメンズ・スタディーズというジャンル付けがなされている。一般の欧米人向けガイドブックがあまり取り上げない日本の北部地域を知ることができる読み物としては興味深いのが、上述したようにジェンダーと民族との関係性に目を向けていない点などからして、ウィメンズ・スタディーズの文献として見るならば物足りなさは否めない。

文献

- 井野瀬久美恵 (1998): 『女たちの大英帝国』講談社現代新書, 244 p.
- 井野瀬久美恵 (1999): メアリ・キングスリの西アフリカの旅——フィールドワークにおける民族とジェンダー——. 栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ——』人文書院, 47-76.
- Bird, I. L. (2000): *Unbeaten Tracks in Japan: With an Introduction by Evelyn Kaye*, San Francisco, Traveler's Tales, Inc., 348p. (*Unbeaten Tracks in Japan* first edition published 1880 by G. P. Putnam's Sons, New York.)
- Kaye, E. (1999): *Amazing Traveler Isabella Bird—The Biography of a Victorian Adventurer—*, 2nd ed., Boulder, Colorado, Blue Panda Publications, 251p.

さいとう・もとこ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
比較文化学専攻博士後期課程